銭形平次捕物控

人形の誘惑

野村胡堂

青空文庫

一

新吉は眼の前が眞つ暗になるやうな心持でした。二年越言ひ交したお駒が、お爲ごかしの切れ話を持出して、泣いて頼む新吉の未練さを嘲けるやうに、プイと材木置場を離れて、宵暗の中に消え込んで了つたのです。

——父親が聽いてくれないから、末遂げて添ふ見込はない。出世前のお前さんに苦勞をさせるより、今のうちに切れた方が宜い——といふのは、十八や十九の若い娘の分別といふものでせうか。

——父親の不承知は今に始まつたことではない、版木彫りの下職に、何程の出世があらう——と詰め寄ると、お駒は唯もう父親の不承知一點張で、取付く島もないやうな冷たい顏をして、——これからは逢つても口を利いておくれでない、つまらない噂を立てられると、お互の爲にもならないから——そんな念入りな事まで言つて、美しいおもかげだけを殘して、一陣の薫風のやうに立去つたのでした。

「新さん」

不意に、後ろから聲を掛けた者があります。

「——」

默つて材木から顔を離して振り返ると、肩のあたりへ近々と、お駒の繼母のお仙が、連れ子の少し足りない定吉と一緒に、心配さうに立つて居るのでした。濡手拭を持つて居るところを見ると、町内の錢湯へ行つた歸り、夜遊びに出た愚かな伜と一緒になつたのでせう。もう十九にもなる定吉は母親の後ろから顔を出して、大の男の泣くのを、世にも不思議さうに眺めて居ります。

「新さん、お前さんは可哀想だね。——聽いちや惡いと思つたけれど、出逢頭で、逃げることも隱れることも出來ないんだもの、皆んな聽いて了つたよ」

「——」

「あの娘はね、あの通りの氣象者だから、お前さんの氣持も考へずに、ポン〳〵切れ話をするんだらう」

「——」

「新さん、お前さんの前だから言ふんぢやないが、私は蔭乍ら隨分骨を折つた積りさ。生さぬ仲の遠慮はあるにしても、あんまり勝手で見て居られないから、——どんな事があつても、新さんを捨てちや冥利が惡い、もう一度考へ直すやうに——つてネ」

お仙は新吉の背でもさすつてやり度い樣子でした。房五郎の後添、お駒の爲には繼母に相違ありませんが、本當によく出來た人で、四十八九にしては若々しい容貌と共に、町内でも褒めものの女房だつたのです。

「――」

新吉は恐ろしい激情に打ちひしがれて、口もきけない様子でした。二十一にもなつて居るくせに、氣の弱い生れ付きで、男前でも立派でなければ、親分手合の房五郎の娘と、割ない中になるやうな、大した貫祿の人間ではなかつたのです。

「新さん、短氣を起しちやいけないよ、又そのうちに良い話があるかも知れない。――私ぢや大した力にもならないが、夫の罪亡ぼしもあることだから、出來るだけの事はして上げ度い」

せめてこの母親の半分もお駒に眞心があつたら――と新吉は又新しい涙を誘はれました。

「おつ母ア、歸らうよ」

伜の定吉は、二人の話に退屈して、グイグイと母親の袖を引きます。

「兎に角、あまりクヨクヨしない方が宜いよ。今まで通り、時々は家へも遊びにも來るんだネ。明日の晩は節分で、夫は參會があつて淺草へ出掛けるし、私は定吉と明神樣へお詣りに行くから、その間に來て、よくお駒と話して見ては何う？　お駒だつて、父親の言ふ事や、持參付の聲の事ばかり考へて居るわけでもあるまいから」

「えツ、持參付の聲？　それは一體誰のことです」

思ひも寄らぬ話に、新吉は愕然とした樣子でした。お駒が急に冷淡になつて、愛想盡かしと言つても宜いほどツケツケ物を言つた原因が、繼母のお仙の口からはつきり知られたやうな氣がしたのでした。

「おつ母ア、歸らうよ」

定吉はグングン母親の手を引きました。十九と言つても、智惠の足りない子は反つて身體の育ちがよく、十三十五の町の少年達と遊んで居りますが、身體だけ見れば、立派な一人前の若い衆で通る恰幅だつたのです。

二

「新吉、諦めた方が宜いぜ。親爺も親爺なら娘も娘だ。あんな犬畜生にも劣つた雌に、未練を殘すことがあるものか」

翌る日の晝頃、新吉には義理の兄の岩松が、煮えこぼれるほど腹を立てゝ歸つて來ました。人を害めて島流しにされたことのある人間ですから、どうせ物優しい男ではありませんが、三十を越して、滅切り物靜かになつた兄哥が、こんなに腹を立てたのは、一緒に住んで居る新吉もあまり見たことがありません。

「兄さん、何をそんなに――」

新吉は言ひかけて口を縫みました。お駒を犬畜生にする岩松に、反感らしいものを持たないではありませんが、さうかと言つて、この氣の強い義兄に、楯を突くことは思ひも寄らなかつたのです。

「お駒は角の酒屋の次男坊と一緒になるんだとよ、持参付の聟だ、こちとらは傍へも寄り付けるこつちやねえ」

「えツ、矢張りあの辰之助と――」

昨夜お仙の言つたことが、犇々と思ひ當ります。

「打ち殺してもやり度えが、――あの女には、お前まだ未練があるだらうねえ」

「いえ、兄さん」

「さうぢやねえ。俺の眼は見通しだ。昨夜からお前、ろくに物も食はないぢやないか」

「――」

「あの親父の房五郎は、四年前の明神様の大喧嘩の時、二三ならず人を害めて居る。女房子があるし、年も取つて居るから、可哀想だと思つて、若い俺が一人で罪を背負つてやつたんだ。俺があの時ベラ〳〵申上げて了へば、今頃は三宅島の土になつて居る野郎だ」

「――」

岩松の憤激は尤もでした。明神様の境内で土地のやくざが大喧嘩を始めた時、年が若くて一本調子で、酬いられない苦勞をするのを、一番男らしい仕事と思ひ込んで居た岩松は、房五郎の分まで罪を背負ひ込んで、三宅島へ流されたのは四年前の夏、上様御不例やら、勤向の神妙さやらで、許されて江戸に歸つたのは、ツイ半年ばかり前のことだつたのです。

「俺が島から歸つて來ても、ろくに挨拶もしねえ。義理も知らねえ野郎だと思つて居ると、挨

拶の出來ないわけがあつたんだ。なア新吉、手前も薄々聞いて居るだらうが、あの房五郎の野郎は、俺が島から歸つて來るのを煙たがつて、御赦免の噂が立つと、内々俺だけその御沙汰に漏れるやうに、お役人へ手を廻して頼み込んだつて言ふぢやないか」

「――」

新吉は返答に困りました。房五郎が恩人の岩松が島から歸るのを邪魔したといふ噂はありましたが、お駒の父親だけに、そんな事があらうとは、信じ度くなかつたのです。

「房五郎の野郎、打ち殺しても飽き足らねえ野郎だが、唯野良犬のやうに殺したんぢや胸が治まらねえ。――俺は此間から、何うして思ひ知らせようか、そればかり考へて居るんだぜ」

「――」

義理の兄乍ら、人殺しの兇状持で、世間から白い眼で見られて居る岩松、――性根の良いことは一緒に暮して居る新吉が百も承知ですが、一たん思ひ立つと、何をやり出すかわからない、恐ろしい激情家でもあつたのです。

「そこでな新吉、俺は大變なことを思ひ付いたんだ。お駒とお前が仲の好いうちは、俺はその氣にもならなかつたが、今となつちや止められる心配もあるめえ。――大きな聲ぢや言へねえが、房五郎を苦しめるのは、自慢の娘のお駒を何うかするのが一番だ」

「兄さん」

「默つて聞け」

「兄さん、後生だから、そんな事は止して下さい。捨てられたのは私の腑甲斐なさで、お駒に少しも悪いことはありません」

新吉は、兄の腕にも膝にもすがり寄つて、その無法な企てを止め度い心持で一杯でした。

「馬鹿野郎、そんな弱氣だから、女の子にまで舐められるんぢや無いか。俺のするのを黙つて見て居るが宜い。——今晩は房五郎も女房のお仙も、あの白痴息子の定吉も留守だつてえぢやないか。こんな折が滅多にあるものか」

「兄さん、そればかりはどうか」

「ならねえよ。疑が手前に掛りさうだと思ふなら、飛離れた遠方へ行つて、亥刻（十時）前は本郷神田界隈に寄り付かねえ工夫をしろ」

「兄さん」

新吉の言葉や思惑などは、耳にも入れてくれる岩松ではありません。まだ三十を越したばかりですが、顔立も氣象も、島の三年の苦役で、すつかり荒されて來たのです。

三

その晩、房五郎の娘、本郷小町と言はれたお駒は、三組町の自分の家の、長火鉢の前で殺されて居りました。

房五郎は評判のよくない男ですが、お駒は本郷切つての人氣娘で、近いうちに、町内の酒屋、越後屋の次男の辰之助が持參付で入聟するといふ評判が立つて居ただけに、この殺しはその晩のうちに、町内中に聞えて了つたのです。

見付けたのは繼母のお仙、丁度節分の晩で、明神樣へお詣りして、夜店などを一と廻り見て、何心なく歸つて來ると、長火鉢に凭れたまゝ、お駒はこと切れて居たのです。

前髪を焦すやうな恰好で坐つて、四方は血の海、後ろへ廻つて見ると、鋭い切出しが、左肩胛骨の下へ、眞つ直ぐに突つ立つて居たのでした。

母のお仙と一緒に明神樣から歸つて來た定吉は、血を見ると有頂天になつて騒ぐのを、お仙はどんなに骨を折つて押へ付けたことでせう。

そのうちに騒ぎを聞付けて近所の衆が集まり、見廻り同心の出役があつて、町役人立會の上、一と通り檢死が濟んだ頃、主人の房五郎は淺草から歸つて來ました。

定吉は女房の連れ子、房五郎に取つてお駒は天にも地にも掛替の無い一粒種で、日頃の可愛がりやうも並大抵で無かつただけ、その悲歎は見る目も氣の毒でした。

「畜生、——下手人はあの版木屋の新吉の野郎に違げえねえ、——仇を取つておくんなさい」

鬼のやうな房五郎が、ボロボロと涙をこぼして、立會の役人の袖にすがる有樣は、あまりの凄慘さに、見る者の顏を反けさせました。

來合せた御用聞、眞砂町の喜三郎は、すぐ新吉兄弟の家へ飛んで行きましたが二人共留守、

半刻ばかり待つて、亥刻半頃、フラリと歸つて來た新吉を、有無を言はせず引つ括つて、房五郎の家の現場へ伴れて來ました。

「親分、何うしたと言ふんで――」

「白ばつくれるな、新吉、手前の仕た事を見せてやるから」

現場にはまだ同心も町役人も居りました。戸口に立ち塞がる人波を掻き分けて入ると、中の血の海も、お駒の死體も其儘。

「あツ、到頭――」

一目見ると新吉は、眞つ蒼になつて、ヘタヘタと坐つて了つたのです。

「野郎ツ、何が到頭だ、――昨夜この娘に、小つぴどく振り飛ばされたつて言ふぢやないか。お前がやらなくて、誰がこんなに虐たらしい事をするものか。よくその怨めしさうな顏を見て置け」

死んだお駒の肩を取つて後ろへ引くと、血の氣のうせた眞白な顏は、ガツクと上を仰いで、丁度新吉の顏とピタリと合ひました。蝋のやうな透き徹る娘の顏には、不思議なことに、何の怨も驚きもなく、幸福な思ひ出し笑ひが浮んで居さうで、反つてゾツとさせるものがありました。

「お駒」

新吉は一歩近づきました。が、次の瞬間、恐ろしい激情がこみ上げたやうに、火鉢越しに這

ひ寄つて、その眞つ白な死に顏へ、自分の顏を寄せようとするのです。

「巫山戲（ふざけ）たことをしあがる。——手前なんかに馴々しい事をされちや、お駒が浮ばれめえ。來やがれ」

パツと繩尻を引くと、新吉は操（あやつ）り人形のやうに、ヨロヨロと立上がつて、聲もなくさめ〳〵と泣き出すのでした。

「この切出しは手前のだらう。版木屋か、彫物師（ほりものし）でも無ければ使はない道具だ。柄（え）に籐（とう）を卷いて、端つこに（新）といふ字が書いてある」

お駒の背から拔いた血染の切出し、紛れもなくそれは、新吉の仕事場から持出したものです。

「それは——」

「知らねえとは言はさねえよ。兎に角、番所へ來やがれ。旦那衆のお調べを願つてやる」

眞砂町の喜三郎は、功名に陶醉した心持で、ピシリと繩尻を鳴らしました。まだ三十臺の賣出し盛り、ツイ功名を急ぎ過ぎる癖はありますが、この稼業の者にしては、物のよく解つた男だつたのです。

四

「親分、あれを聞きなすつたかい」

「何んだ、八」
「お駒が殺されたつて話――」
「さうだつてネ、可哀想に、房五郎は憎い男だがお駒は氣の毒さ。尤も、あんなに綺麗ぢや隨分殺し度い者も多勢あつたらうが」
捕物の名人で、江戸開府以來と言はれた御用聞、錢形平次は、子分のガラツ八こと、八五郎を迎へて何時にもなく斯うしんみりしました。
「それがあべこべなんで、親分」
「何があべこべだ」
「憎いのはお駒で、可哀想なのは房五郎だ――といふ町内の評判ですぜ」
「ハテね」
「お駒の阿魔は、二年越言ひ交した、版木屋の新吉を振り捨てゝ、越後屋の辰之助を、持參金三百兩で聟にすることになつたんで、新吉はカツとなつて、仕事場から切出しを持つて來て殺つ付けたんだ相ですよ、親父の房五郎は大病人同樣、今日は枕も上らねえ騒ぎだ」
「下手人は新吉と決つたのか」
平次は靜かに問ひかけました。
「最初は知らぬ存ぜぬで頑張つた相ですよ。昨夜は宵の口から亥刻前まで、本所の友達のところで花合せをやつて遊んで居たと言ふんで、眞砂町の喜三郎兄哥も持て餘して居ました」

「フーム」

「その本所の友達のところを當つて見ると、成程それに違ひない。證人が七人、少し多過ぎる位だ。その上、新吉は日頃に無い大はしやぎで、自腹を切つて一升買つて、皆んなに振舞つて大騒ぎをやつたんですぜ」

「――」

「歸つたのは亥刻少し前、――どんな手品を使つたつて、お駒を殺せるわけは無え。繼母のお仙は、戌刻（八時）に出かけて、亥刻（十時）に歸つた時は、お駒は間違ひもなく死んで居たんだ」

「俺が叱られて居るやうだぜ、八」

ガラツ八の氣組の面白さに、平次もツイ笑ひました。

「それでも新吉が下手人だと言ふなら、憚り乍ら眞砂町の兄哥もヤキが廻つたネ」

「つまらねえ事を言ふな」

「今賣出しの眞砂町が聞いて呆れらア、暮の商賣ぢやあるめえし」

八五郎が好い心持に啖呵を切つて居る時でした。

「今日は、――錢形の兄哥は居なさるかい、あつしは」

噂をすれば影で、戸口へ來たのは眞砂町の賣出し、喜三郎が立つて居たのでした。

「あツ、しまつた」

八五郎は尻尾を巻いて逃げ出さうとしましたが、その時早く、お靜に案内された喜三郎は、ニヤリニヤリと笑ひ乍ら入つて來たのです。

狹い住居、もとより先刻の威勢の良い啖呵が、門口に立つて居た喜三郎に聞えなかつた筈はありません。

五

「今までの經緯は、八五郎兄哥から聞きなすつたらう。證據が山ほどあるし、お駒を殺す程怨んでるのは、新吉の外には無い筈だが、困つたことに、お駒の殺された時刻は、酒と花合せに夢中で新吉は小用にも立たないと解つて居るんだ」

「――」

深々と腕を組んだ平次を前に、喜三郎は斯う語り進みました。

「それだけなら、外の下手人を搜せば宜いわけだが、もう一つ困つたことがあるんだ」

「――」

「新吉が殺す筈は無いと解つて、歸さうとすると、――實はお駒を殺したのはこの私で――と新吉本人が言ひ出したんだ」

「ヘエ――、それは面白いな」

錢形平次の頬は漸く綻びました。

「俺にはどうも面白いとは思へねえ。最初殺した覺えは無いと言つたが、本所の友達の家から一と足も出ないと解ると、殺したのは俺だと言ひ出しあがる。——外にお駒を殺す者は無し、こんな弱つたことが無い。どう考へても解らないから、兄哥へ智慧を借りに來たんだが、——どうしたものだらう」

喜三郎は若くて淡白でした。近頃江戸中を壓する平次の名聲を妬む色もなく、同じ御用を承はる身の恥を忍んで、斯う智慧を借りに來たのです。

年の頃も平次と同年輩、平次の拔群の男前に比べると、少し頑固で無器用ですが、江戸ツ子肌らしい、物にこだはらぬ氣象が人に親しませます。

「兄哥、有難てえ、此方からお禮を言ふよ。——實は俺にも少し考へがあつたんだが、繩張がうるさいから、默つて居たんだ。——兄哥でもなきア、こんな事を淡白相談に來ちやくれまい」

平次は兩掌を揉み合せて喜んで居ります。

「さう言はれると俺も器量がよくなるが、實は此處の入口に立つた時は、穴へでも入り度かつたよ」

「八の野郎が飛んでもない事を言やがるからだ。——氣を惡くしないでくれ、後でうんと油を取つて置くから」

平次の話を聽くと、ガラツ八は向うの方でピヨイピヨイとお辭儀をして居ります。膝小僧が

ハミ出した狹い袷、鬚の刷毛先の、神田つ子らしく、左へ曲つて居るのも間が抜けます。

「八兄哥に惡いことは少しも無い。——ところで兄哥、町内の若いのを、虱潰しにしらべたが、お駒と引つかゝりのあるのは、新吉の外には一人もねえ。泥棒にしては無くなつた物が無いし、——」

喜三郎はもう用談の方へ入つて居りました。

「お駒は入口へ背を向けて居たらうか」

と平次。

「いや、入口の方へ顏を向けて、刺された背中はお勝手を向いて居た」

「お勝手の戸は？」

「内から締めて、輪鍵が掛つて居た筈だ」

「お駒に氣が付かないやうに、下手人は後ろへ廻れないわけだね」

「その通りだ。——下手人はお駒のよく知つてる者とまでは俺も見込を付けた」

喜三郎もこの時ばかりは得意さうでした。

「お駒が長火鉢の前へ來て坐る前に入り込んで、押入か何處かへ隱れて居たとしたら？」

「さア、其處までは——」

平次の疑は尤もでした。これは決して考へられないことではありません。

「お駒の死體を見た時、新吉は何んて言つたらう」

と平次。

「それはよく判つて居る筈だ。死體を見ると新吉はいきなり、あツ到頭――と言つたやうに思ふ」

「それで澤山だ。新吉は下手人ぢや無い、が、誰かを庇つて居る。兎に角、行つて見るとしようか」

斯うして平次はいよ〳〵此事件に乘出す氣になつたのです。

六

その日の夕刻、新吉の義兄の岩松は番所に呼出されました。

事件が重大と見たのか、與力笹野新三郎出役、眞砂町の喜三郎と銭形平次が腰繩を打たれた新吉を調べて居ります。

「岩松、隱しちや爲にならねえよ。弟分だと思つて、庇ひ立てをすると、反つて不都合なことになるよ」

釘を一本刺した上、いろ〳〵新吉とお駒の關係を問ひ訊しました。

「新吉はそんな大それた事の出來る人間ぢや御座いません」

岩松は一生懸命弟の爲に辯解しましたが、結局、弟の上にかゝる疑ひは、容易に霽れるもの

でない事を呑込まされただけの事でした。

「岩松、氣の毒だが、新吉は免れやうはねえ。自分でお駒を殺しましたと、白状して居るんだ」

「そんな事が、親分」

岩松は百方辯解しましたが、本所に亥刻近くまで居たといふ、新吉の不在證明を知らなかつたので、此上は救ふ道も盡きて了つたと思つたのでせう。

「歸れ。もう宜い」

喜三郎に冷たく言はれると、思ひ定めた様子で、最後の切札を投げて了ひました。

「親分、聽いておくんなさい。——出來ることなら隱し了せようと思ひましたが、弟の新吉が處刑になるのを見ちや居られません。何を隱しませう。お駒を殺したのは、此私で——」

「何だと？」

「何べんでも申します。お駒を殺したのは、此岩松に相違御座いません、——お駒の父の房五郎は、私に罪を背負はせて四年前島へ送らせた上、御赦免になつて江戸へ歸るのを邪魔し、一人で好い兒にならうとした程の惡黨で御座います。打ち殺すのはわけもないが、一と思ひに殺しちや、苦しめやうが足りないから、眼の玉のやうに大事にして居る、房五郎の娘を殺してやりました。——弟の仕事場から、切出しを持つて行つたのが大縮尻で、何にも知らない弟に罪を被せちや、見て居るわけに參りません。弟がお駒殺しを白状したなら、それはこの兄を庇ふ爲で、——氣の弱いあの野郎にしちや、一代の大出來で御座います」

岩松の白状は豫想外でした。いや、豫想外である可き筈ですが、平次も、喜三郎も、笹野新三郎も少しも驚く色の無かつたのは何としたことでせう。

「嘘を吐けツ」

「ヘツ」

平次の聲は辛辣に岩松の口を縅しました。

「お前はどうせ島歸りだから、世間の人に白い眼で見られるよりはと、弟の罪を背負つて行く積りだらう」

「飛んでもない、親分」

「それぢや聞くが、切出しは弟の仕事場から持出して、何んな具合にして持つて行つたんだ」

と平次。

「手拭に包んで、懷中へ入れて行きました」

岩松はスラスラと言つて退けます。

「その手拭の模樣は？」

「白と淺黄の染分けで、眞ん中に橘の模樣があります」

「フーム」

平次は思はず唸りました。

「それに違ひないでせう、親分」

岩松は番所の隅に小さくなつて居る弟の新吉を顧み乍ら、何となく重荷でもおろしたやうな顔をして居ります。

「その手拭は何處へやつた」

平次は追及の手をゆるめません。

「血が附いたので、何處かへ捨てゝ了ひました」

「ところで、もう一つ訊くが、お前が入つた時、お駒は何處に何うして居たんだ」

「長火鉢に凭れて居りました」

「聲を掛けたか」

「いえ、そんな事をしちや聲を出されて失策ります。格子戸から飛込むと、障子を開けて、いきなり長火鉢に凭れて居るのを、後ろから突いて了ひました」

「格子を開けた時氣が付かない様子だつたのか」

「定ちやんかい——と言ひました」

岩松の話は、疑ふ餘地の無いほど判然して居りますが、平次は喜三郎と笹野新三郎を顧みて、何やらうなづき合ひました。

「岩松、お前は飛んでもねえ野郎だ」

「ヘエ、——相濟みません」

「お駒は入口の方へ向いて居たぞ。聲を掛けずに後ろから刺せるわけは無い」

「ヘツ」

「お前のやうに物騒な人間が入つて行けば、第一若い娘は聲を立てる。近所はあの通り近いが、誰もお駒の聲を聽いた者も無い」

「――」

平次の話は豫想外なことばかりでした。

「それから、お前の手拭――橘の模樣のある染分けの手拭は、血も何にも附かずに、お駒の殺された隣の部屋の押入に投り込んであつたよ。これは何ういふわけだ」

「――」

「新吉を庇ひ立てするのも宜いが、ウソはもう少し器用に吐くものだ」

平次の明察には、一言の抗ひやうもありません。

「恐れ入りました、――」

岩松は強か者らしい頭を垂れて、暫らく唇を噛みます。

「それ見ろ。――ところで、本當の事を聽かして貰はうぢや無いか。岩松、お前はお駒を殺す氣で、弟の細工部屋から切出しを持出し、橘の模樣の手拭に包んで、お駒の家の前まで行つた事は本當だらう。それからどうした」

あまりによく知り過ぎて居る平次の言葉に、岩松は飽氣に取られてその顏を眺めて居りましたが、思ひ直した樣子で、斯う續け出しました。

「恐れ入りました。それに相違御座いません。房五郎への怨み、弟の歎き、お駒を殺して胸を晴さうと、あの格子まで開けましたが、障子一重と言ふところでお駒に聲を掛けられ、急に氣が變つたので御座います。――一生島で朽ち果てる積りなのが、たつた三年で江戸へ歸つたのも何かの運、このまゝ安穩に暮せるものを、つまらない怨や意氣張で、若い女一人を殺せば、今度は私も命がありません。耻かしい事ですが、急に命が惜しくなつて、後をも見ずに逃げ歸り、友達の家で夜更けまで飮んだやうなわけで御座います。翌日、弟が縛られたと聞いて、私の腑甲斐ないのに腹を立てゝ、新吉がやつたのかしらと、一應は思ひましたが、この男は生れ付きの善人で、氣の弱い事この上なしですから、人を殺せる筈はありません。これには何か、深い仔細が御座いませう。親分、旦那、どうぞ、もう一度調べ直して弟を許してやつて下さいまし」

岩松の言葉には、もう掛引も僞もあらうとは思はれません。それを聞いて一番驚いたのは、隅の方に蹲まつて居た、繩付の新吉でした。

「兄さん、有難い。――兄さんのした事とばかり思ひ込んで、身に覺えの無い罪を引受けたが、兄さんが潔白と判れば、もう心配することは無い。親分、私は何にも存じません。あの晩兄の見幕が恐ろしかつたので、私は臆病のやうだが、兄に言はれた通り、本所へ逃げて行つて、亥刻までは家へ歸るまいと思つたので御座います」

氣の弱い新吉は、自分の臆病さを責め乍らも、不在證明を拵へずには居られなかつたのでせ

う。

後で兄に疑が掛りさうなのを見て、急にお駒殺しが自分の仕業だと言ひ張つたのは、兄に對する自分の腑甲斐なさの申譯でもあつたのです。

「――」

平次も喜三郎も、笹野新三郎も、何にも言ひませんでした。此の様子では、新吉はまだ許されるか許されないか、見當も付かなかつたのです。

七

疑は當然繼母のお仙の方に向ひました。

恐ろしく丁寧な家探しを繰り返しましたが、併し、何にも新らしい證據は出て來たわけではありません。

お仙は思ひの外心掛の良い女だといふ證據と、お仙の連れ子の定吉が、白痴（ばか）のくせに妹分のお駒に懸想して、蚯蚓（みゝず）のたくつたやうな手紙を書いて、人の惡いお駒に飜弄（ほんろう）されて居たことが判つた位のものでした。

「お神さん、明神樣へは、定吉と一緒に行つたんだね」

「ハイ」

番所に呼出されたお仙は、何の思ひ煩ふ様子もなく神妙に答へます。

「時刻は？」

これは喜三郎でした。

「家を出たのは戌刻（八時）頃、近いところですからブラブラ行つて、亥刻（十時）ぎり〳〵に歸つて參りました」

「定吉と離れたことは無かつたのか」

と喜三郎、

「明神樣へお詣をしてから、定吉は境内にある見世物が見たいと申しましたが、私は頭痛持で、あんなものを見ると、眠られなくて困りますので定吉だけを入れて、私は一人外に待つて居りました」

「時刻にして、どれほどだ」

「半刻ともかゝりません」

「見世物は何んだい」

「竹田人形で御座います、暮からズーツ掛かつて居ります」

「フーム」

喜三郎は唸りました。定吉と半刻でも離れて居たとすれば、その間に三組町まで飛んで來て、お駒を殺して、又元の場所へ歸られないものでもない——と思つたのでせう。

平次はお仙の顏と、喜三郎の顏を等分に見比べて居りましたが、

「眞砂町の、濟まないが、俺にちよいと任せては貰へないか、少し訊いて置き度いことがあるが」

變なことを言ひ出します。

「宜いとも」

喜三郎は素直に身を引きました。お仙に關る疑が濃厚になると、平次に任せて、もう少し證據固めをして置かうと思つたのでせう。

「お神さん、——つかぬ事を訊くやうだが、平常お前さんとお駒との間は、どうだつたらう？」

「ハイ」

「正直に言つて貰ひ度いが——」

「表向は何にも御座いませんでしたが、矢張り生さぬ仲で、お互に辛いことも、泣くことも御座いました」

お仙の言葉は思ひの外でした。

「喧嘩をするやうな事もあつたらうな」

「お恥しいことで御座います」

「お駒が死ねば、房五郎の跡取は定吉といふことになるだらうな」

平次の問はいよ〳〵突つ込んだものでした。

「そんな事になりませうか」
「房五郎の身上はどんなものだらう」
「あの通りの渡世で、何程のものも御座いません」
「房五郎はお駒を大層可愛がつて居た相だが、お神さんは良い心持では無かつたらうな」
「何とか良い心持にならうと骨を折りました、皆んな私が至らぬからで」
お仙は涙組んで居る様子です。
「定吉とお駒と一緒にするやうな話は無かつたらうな」
と平次。
「一つ違ひで、兄妹と言つても、赤の他人ですから、本人同志がその氣なら、一緒にして一生側で暮し度いと思ひましたが、こればかりは親の儘にもなりません、定吉はあの通りで――」
「定吉はお駒のことを何う思つて居るだらう」
「それはもう、お駒は綺麗ですし、定吉も年頃の事で――」
此處まで行くとお仙ははつと言葉を切りました、うつかり倅の定吉――あの白痴の定吉に、あらぬ疑がいつてはならぬと思つたのでせう。
「それで？」
平次は素知らぬ顔で次を促しました。
「親分さん、定吉は私と一緒に出かけて、私と一緒に歸つて居ります。ほんの四半刻ばかり、

見世物の中へ入つた切り」

「解つた〳〵、心配することは無いよ、お神さん」

平次はさう言つてこの調べを打切りました。

八

「錢形の兄哥、あのお神さんを縛つたものだらうか」

自分の家の方へ歸つて行くお仙の後ろ姿を見送つて眞砂町の喜三郎は言ひました。

「いや、あのお神さんは此上もない善人だ、決して人を殺す女ぢやない」

平次は何やら考へて居ります。

「だが、お神さんより外に、お駒を殺す者は無いことになるぜ」

喜三郎はなか〳〵諦めません。

「襦袢二枚と、薄綿入を着て居る人間を、後ろからたつた一と突きで殺せる女があるだらうか」

と平次。

「フーム」

「お駒は聲も立てず、苦しみもせずに死んで居る。あれだけの業をするのは、男でも餘程力のある者だ。お仙のやうな華奢な人間では、綿入を通すだけでも六つかしい」

「――が、下手人はどうしてもあの家の者か、あの家へ自分の家のやうに出入する者だ」

喜三郎も屈しては居ません。

「房五郎か、でなければ定吉か――と言ふことになる」

「房五郎は淺草に居た、――これは新吉よりももつと多勢の人が證人になつて居る」

「定吉は竹田人形の小屋の中に居た、――お仙は嘘を吐く筈はない」

これで事件はハタと壁に突き當つて了ひました。

「兎に角、明神様まで行つて見るとしよう」

平次と喜三郎とガラツ八は立上がりました。事件が容易に目鼻が付きさうも無いので、與力笹野新三郎は、とうに八丁堀へ引揚げて了つたのです。

「此處から明神様の境内まで、女の足で、四半刻足らずで行つて來られるかどうか、一つ試して見るんだね」

八五郎は寒空に毛脛を出し駈け出しさうにして居ります。

「お仙が騙けたといふのかい、――毛脛を出して」

と平次。

「ヘツ、正に一言もねえ」

無駄を言ひ乍ら明神様の境内に着いた時は、もう陽が落ちかけて居りました。

裏へ廻つて、その頃評判を放つた竹田人形の木戸を入ると、寒い時分で、さすがに見物がチ

ラリホラリと居るだけ、人形の生けるが如き姿態が、夕陽を受けて、無氣味な艶めかしさで人に迫るのでした。

小屋を一と廻り。

「節分の晩はどうだつたえ」

平次は小屋の者らしいのを捉まへて訊くと、

「あの晩は峠でしたよ、よく入つたもので」

そんな事を言つて大して忙しさうもなく、裏の方へ消えて了ひました。

竹田人形は小栗判官照手姫十二段返し、わけても照手姫の松葉燻しが良い出來で、梁に吊られた照手姫の、苦痛に歪む姿態の惱ましさ、白い脛と赤い裳に、メラ〳〵と絡みさうになる仕掛の焔の凄まじさ、亂れ〳〵た髪、蒼白い——が妙に人を牽付ける顏、乳の上で絞つた荒繩など、極めて變態的ながら、たとへやうもない艶美なものだつたのです。

「成程、これは良い出來だ」

そんな事を言ひ乍ら、小屋の後ろの方、見物人の爲に作つた、葭簀張の便所の側まで行くと、平次は默つて突立つたまゝ、暫くは動かうともしません。

「あれを押してくれ、八」

「ヘエ」

ガラツ八は少し這ひ加減に葭簀の下の方を押すと、其處だけは、杭と縁が切れて、手に從つ

て、かなり大きい穴が開いて行くのです。

「此處から人間が潜つて出て、そつと入られない事はあるまい」

平次の靜かな言葉は何も彼も解決して了ひました。

「矢張り、あの白痴か」

と喜三郎。恐ろしい失望とも屈辱ともつかぬ感情が、三人の顔を硬張らせます。白痴にうまうまと擔がれた馬鹿々々しさを、つく／〃＼感じ入つたのでせう。

「さア、引返さう」

「無駄だ」

平次は默つて夕靄の中を眺めて居ります。

「何うした、錢形の」

「先刻は氣が付かなかつたが、定吉はもう生きては居まい」

「えツ」

「兎に角、行つて見よう」

平次とガラツ八と喜三郎は、今度は何の遠慮もなく、夕方の街を驅け出しました。

三組町に着いて、房五郎の家へ飛込んだ時は、平次が豫言したやうに何も彼も終つて居りました。

房五郎が二階で寢て居るうちに、女房のお仙は連れ子の定吉を殺して、自分も死んで居たの

です。

　定吉は此世で一番信頼する母親の手で、死ぬまで何にも知らずに居たことでせう。二挺剃刀（ちやうかみそり）で後から咽（のど）を切られ、血汐の海の中に突つ伏し、お仙はその上に崩折れて、これも見事に生害して居たのでした。

　房五郎の驚き――いや、そんな事は書くまでもありません。

×　×　×

「八、相變らず繪解を聽かして貰ひ度いと言ふのだらう」

歸つて來ると、熱いのを一本つけさして、平次は斯んな事を言ひました。

「ヘエ、先刻からウヅウヅして居るんで」

　八五郎は前へ乘出して膝小僧を隱します。

「何でもないよ。新吉、岩松の兄弟は飛んだ仕出しさ。だが、あの二人は何んとなく好きなところのある人間だよ、――それよりも惜しいのはお仙さ」

「お仙は」

「お駒は房五郎の娘だ、恐ろしく惡い女だ。あれほどの容貌で、白痴の定吉を玩具にして居たんだ。火遊びの遊びが過ぎて殺されたのさ」

「――」

「お袋を待たして見世物へ入つた定吉は、あの照手姫を見るとムラ〳〵とお駒を思ひ出したの

さ。便所の側から飛出して歸ると、岩松が歸つたばかりで戸口には手拭に包んだ切出しが落ちて居る。それを拾つて入つて、一たん押入へ投り込んだが、お駒にからかはれて、急に殺す氣になつたんだよ。根が白痴だからたまらない、ゲラゲラ笑つて居るお駒の背後から双手突にズブリとやり、其儘見世物へ歸つて、先刻の穴からもぐり込み、表から出て母親と一緒に歸つたんだ。お駒の死體を見て急にはしやいだのはその爲だよ。萎れて見せるほどの智慧は無いんだね」

「親分、見て居たやうだね」

「それより外に考へやうがないよ。あれは白痴だが、白痴のくせに、恐ろしく惡賢こいところがある」

「お仙が定吉を殺したのは？」

「新吉でなく岩松でなく、自分でないとするとお駒を殺すのは定吉より外にない、見世物小屋の外で待つて居て、あんまり長かつたことや、定吉の様子が變だつたことを思ひ合せて早くも感付いたのさ。番所から歸した時の顔色は無かつたよ、あの時氣が付くとよかつたが――」

「――」

平次の顔にはあり〳〵と悔恨の色が動きます。

「歸つて定吉に訊くと、定吉は母の前だから、ペラ〳〵喋つて了つたのさ。定吉の性質や、お駒との關係も知つて居るので、お仙は何も彼も讀み盡して、白痴な子を處刑にされるよりはと、

女心の淺墓な親子心中をしたのだらう。白痴と判ればお上にも御慈悲があつたらうに、――お仙は可哀想なことをしたよ」

平次は暗然としました。この事件は後々までも平次の心持を暗くした様子ですが、その代り新吉岩松といふ二人の友達が出來たのを、どんなに喜んだかわかりません。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第五巻　蝉丸の香爐」同光社磯部書房
　1953（昭和28）年5月25日発行
　1953（昭和28）年6月20日再版発行
初出：「オール讀物」文藝春秋社
　1935（昭和10）年2月号
※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：門田裕志
2015年5月6日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控
人形の誘惑

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　野村胡堂
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/